

幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業 中間成果報告会資料

令和5年11月8日
津和野町教育委員会

目次

1. 架け橋期のカリキュラムの概要
2. カリキュラム作成のプロセスについて
3. 教師の指導・援助および子どもの学びの変化
4. 次年度以降の展望について

1. 架け橋期のカリキュラムの概要（1）

Vision

子どもたちが安心して生活ができ、探究心が育まれる環境を創る

期待する子ども像

好奇心から始まり、対話と協働を通して自己実現がはかれる子

育てたい観点

対話

探究

協働

根底にある安心感

1. 架け橋期のカリキュラムの概要（2）

<カリキュラム作成にあたって意識している事項>

- ①町が「0歳児からのひとつづくりプログラム」として、0歳～18歳までの学びの連続性を示したカリキュラムを定めており、それに関連づける形で架け橋期のカリキュラムを作成している。
- ②架け橋期に関わる学校と園全体（小学校4校、保育所7園）で共通の指標、言語を用いて作成を進めているが、各校区の実態や環境が異なるので、具体の取り組み内容などは、それぞれで作成する余白を設ける方向で進めている。
- ③作成したカリキュラムが形骸化しないように、エコシステムでサステイナブルなカリキュラムとなるよう意識して作成にあたってている。
- ④津和野町版架け橋カリキュラムは、5歳児と小学1年生を貫くシートと、保育園・小学校のそれぞれで子どもの姿や生活科を中心としたドキュメンテーションや記録を行えるシートの2段方式で考えている。

2. カリキュラム作成のプロセスについて（1）

○推進体制

（R4、R5年度）

モデル校区・・・日原小学校区（小学校1校、保育園3園）
架け橋期のカリキュラム開発会議

＜委員＞小学校・保育園3園（管理職、担任）

有識者3名

教育魅力化コーディネーター（保小連携担当）

幼児教育コーディネーター

教育委員会事務局・健康福祉課の担当者

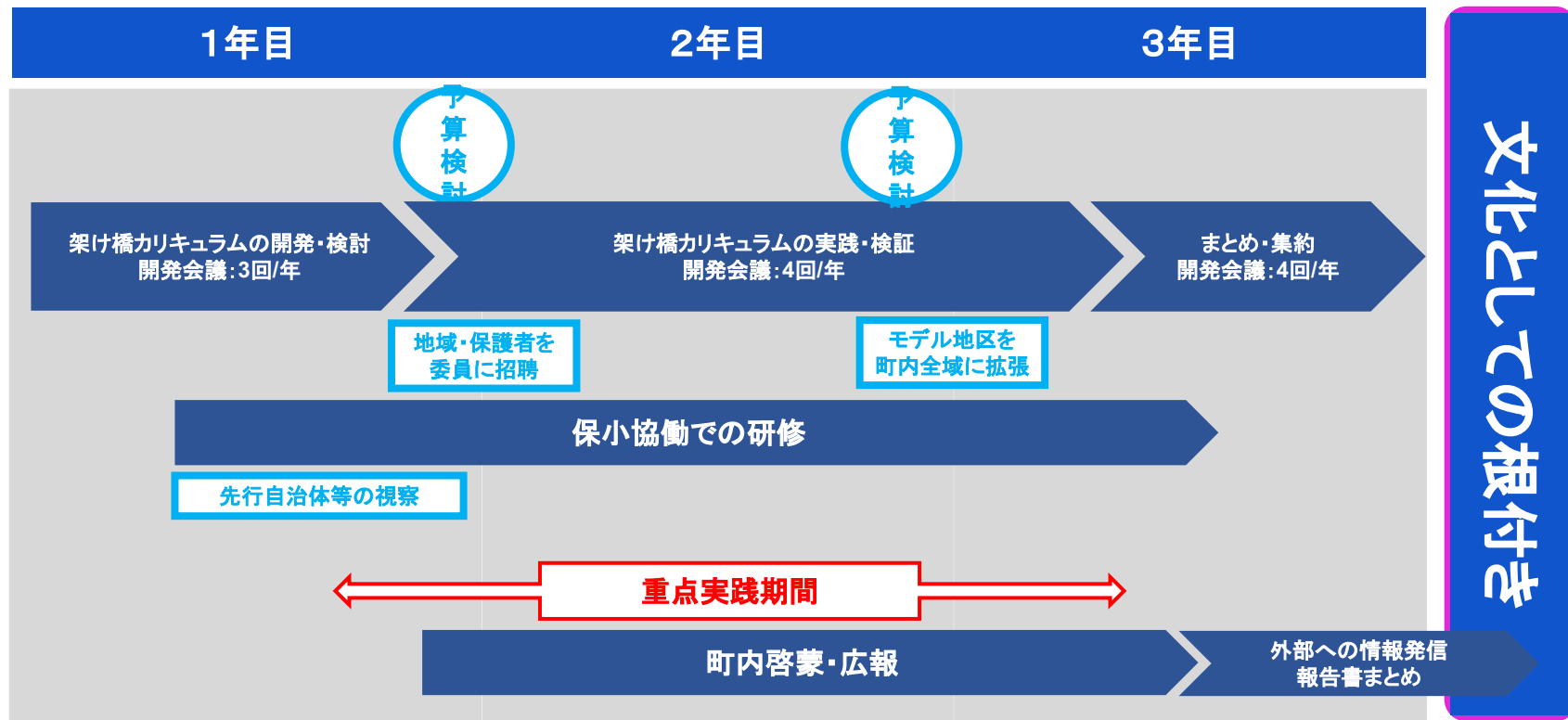
R4年度は3回開催。

R5年度は年4回開催予定で、2回開催済み。



2. カリキュラム作成のプロセスについて（2）

津和野版架け橋プログラムの実施方法と3年間の流れについて



2. カリキュラム作成のプロセスについて（3）

<開発会議における議論の経過>

①令和4年度第1回開発会議

- ・カリキュラム作成にあたっての基本的な考え方の整理

- 行政主導などいわゆるトップダウンで降りてくるカリキュラムの作成ではなく、時間がかかることを念頭に置きながら現場の声を手がかりにしてボトムアップで作成していくことを大切にする。
- あらかじめゴールを決めるのではなく過程から生まれてくることを大事に「**プロセスイノベーション**」方式でカリキュラム作成を進めていく。

※架け橋事業に採択される前の令和3年度からモデル地区となる日原小学校区で保小連絡協議会を立ち上げていたため、会議体設置についてのハードルが低かったことで、この考え方による良いスタートが切れたと考えている。

2. カリキュラム作成のプロセスについて（4）

②令和4年度第2回開発会議

- ・研究テーマの設定

⇒リーダー層（園長・教頭・校長）と担当教員を中心に、思いや課題感、チャレンジしてみたいことなどの言語化を行いカリキュラムのベースとなる期待する子ども像や姿の共通項の抽出を行った。

テーマ（キーワード）・・・「探求」「対話」「協働」

③令和4年度第3回開発会議

- ・共通指標の検討

⇒教師と保育士が同じ目線で子どもを見ていくための共通指標が必要ではないかとの意見が出されたことから、指標の作成を行う事とした。

2. カリキュラム作成のプロセスについて（5）

○令和5年度における進め方

開発会議において方針を検討し、共同実践と振り返りにより、実践内容の見直しや、学校・保育園での実践への繋がりについて検討を進めている。



会議にてそれぞれの園・学校の教育目標や子ども像、姿を出し合いながら、共通項を落としていく。



5歳児と1年生の共同実践を通じて、育ててほしい姿がどんな環境で見られたかなど、「子どもの姿ベース」での見とり。



見とった場面を振り返りながら、「子ども主体」に繋がっていく文言を修正しつつカリキュラムに反映していく。

2. カリキュラム作成のプロセスについて（6）

1年半に渡る会議や実践を通じて、子どもの内から生まれる探究がまず先にあり、協働と対話はその後についてくるものという考えに行き着いた。これまで「対話」「協働」「探究」としていた期待する子どもの姿から変更し、探究を前列に切り出して3つの要素に分解した。最優先したい、育てたい子どもの姿の「探究する心」に注力して、「対話」「協働」については大人がその環境をいかにつくることのできるかという表現でカリキュラム作成を行なっている。

津和野町版架け橋カリキュラム(暫定案)

期待する子ども像		好奇心から始まり、文		
Period		フェーズ1	フェーズ2	フェーズ
架け橋期の終わりにまで育ててほしい姿	プレイフルラーニング (好奇心)	興味、関心を持って自ら環境に関わる。	友だちや保育者の姿を見て、興味関心の幅を広げていく。	自分の興味、関心を他者に知らしめようとする。
	トライ&エラー (思考力の芽生え)	自ら環境に関わる中で、自分なりに試行錯誤をしようとする。	友だちや保育者から刺激を受け、自らの経験と織り交ぜながら、自分なりの考えを生み出そうとする。	自分なりの仮説を立て、友だちの思いを叶えようとする。
	リフレクション (振り返り)	試行錯誤の過程を振り返り、次へ活かそうとする。	友だちと一緒に活動を振り返る中で、他者の思いや考えに触れ、想像を豊かに膨らませる。	話し合いの中で出る様々な意見分の思いも伝えながらよりよい。

2. カリキュラム作成のプロセスについて（7）

○今後の開発会議

- ・カリキュラム案の作成

⇒指標の内容を精査しながら、指標をもとにカリキュラムに落とし込んでいくこと
予定している。

- ・持続可能なカリキュラムであるかの検証

⇒カリキュラム案を作成した後に、実際に、次年度に向けての計画策定を行いながら、持続可能なものになっているか検証を行う。

3. 教師の指導・援助および子どもの学びの変化

- ・今年度から保育園と小学校の共同実践を計画し、現時点で計3回の実践を行ってきた。

その実践中に感じた課題や疑問などを、実践後の振り返りで共有・ブレスト・有識者からのアドバイスをもらう時間を設定している。

<教師・保育士の変化>

- ・特に変化が見られているのは、教師の言葉かけとスタンスである。子どもたちの考えや行動に対して問いかけ直したり、試行錯誤をする場面でその時間を担保したりする姿が増えてきている。

<子どもの学びの変化>

- ・これまでの経験から目の前の課題を解決しようとしたり、新たな遊びや学びをつくろうとしたりする姿が増えてきている。

4. 次年度以降の展望について

- ・モデル地区から他の学校区へ拡大させていくことを予定しており、次年度に向けて、各学校・保育園へ事業の理解を深める説明会などを実施していく必要があると考えている。
- ・各学校区における架け橋会議体の発足と、それぞれの校区で作成するカリキュラムを比較検討しながら、町として貫くカリキュラムのアップデートを行う。
- ・また、カリキュラムが形骸化しないための工夫を検討する必要がある。毎年学校に入ってくる子が異なるという点からも、保育園との対話と協働という、大人の接続をより意識し、ただ会議を行うためとならない仕掛けを準備していく必要がある。

津和野町版架け橋カリキュラム(暫定案)

期待する子ども像		好奇心から始まり、対話と協働を通して自己実現がはかれる子					
Period		フェーズ1	フェーズ2	フェーズ3	フェーズ4	フェーズ5	フェーズ6
架け橋期の終わりまでに育ててほしい姿	プレイフルラーニング(好奇心)	興味、関心を持って自ら環境に関わる。	友だちや保育者の姿を見て、興味関心の幅を広げていく。	自分の興味、関心を他者に知らせ、その面白さを共有しようとする。	新しい環境で生活をする中で、日々の学習や活動に興味をもっている。	探究心をもって予想したり、試したりして、主体的に問題を解決しようとする。	自らの経験則から考えたり判断したりする中で、新たな発見をしたり、もっと楽しくなる考え方に気づいたりして「知る」「関わる」「感じる」ことを面白がる。
	トライ&エラー(思考力の芽生え)	自ら環境に関わる中で、自分なりに試行錯誤をしようとする。	友だちや保育者から刺激を受け、自らの経験と織り交ぜながら、自分なりの考えを生み出そうとする。	自分なりの仮説を立て、友だちと協力しながら自分たちの思いを叶えようとする。	できること・できそうなこと・やってみたいことにトライ&エラーをしながら新たな生活の楽しさを見つける。	できること・できそうなこと・やってみたいことにトライ&エラーをしながら新たな生活の楽しさを見つける。 ※多様なモノ(道具・自然物・生き物など)の性質や仕組みについて考え、よりよい考えを生み出す。	できること・できそうなこと・やってみたいことにトライ&エラーをしながら新たな生活の楽しさを見つける。 ※自ら判断したり、みんなで考え直したりと試行錯誤して、よりよい解決方法を試しながら、その面白さを表現する。
	リフレクション(振り返り)	試行錯誤の過程を振り返り、次へ活かそうとする。	友だちと一緒に活動を振り返る中で、他者の思いや考えに触れ、想像を豊かに膨らませる。	話し合いの中で出る様々な意見や考えを受け止め、自分の思いも伝えながらよりよい考えを生み出そうとする。	新たな集団生活になっても、自分の考えを伝えたり、周りの人々の考えを聞いたりする。	自分の行動や考え方の理由に対して、主観的にそのときの状況や気持ちを言葉や絵などを用いて表現できる。	これまでの経験を用いて自分の思いを伝えたり、他者の考えを受け入れたりしながら、体験したことを次の活動に生かそうとする。
大人の関わり	子どもの学びや生活を豊かにする園・校の環境づくり	子どもの興味や発達段階にあった環境を設定し、夢中になっている様子を撮影して掲示するなど、子どもが自分の姿を振り返ることができるようにする。	子ども同士が集まって対話ができる時間を保育の中に設定し、他者の思いに触れる機会を持つ。	先の見通しが持てるようにボードなどを活用して情報を可視化し、子どもたちが協力してよりよい考えが生まれるようにする。	・子どもたちが安心して生活できる環境空間 ・ワクワクしながら学びに向かえる教室環境 ・小勢一多勢にならない学級風土づくり →園による人数差、集団形成差などへの配慮が必要	・興味・関心の広がりや深まりが起る教室環境 ・思っていることを安心して発言/表現できる環境	・子どもたちの考えたことややってみたいことのトライ&エラーができる環境
	協働(協同性)	日々のサークルタイムの中で、他児の姿が見えるように代弁したり整理したりし、子ども同士が繋がっていくことを意識して関わる。	友達と一緒に1つのことへ向かっていく達成感を味わえるようにする。	同じような目的や課題をもった友だちと協力してそれらを達成/解決する。	新しく出会うクラスメートや他学年、先生たちと共に活動する環境づくりをする。	自分の身の回りのものやこと、人に興味をもちながら自発的に関わえるようにする。	周りの友だちや先生とお互いに意見を共有し合いながら、考えや課題を深められるようにする。
	対話(言葉による伝え合い)	自分の思いや考えを受け止めてもらえる存在となることを意識し、対話することの面白さが伝わるようにする。	クラスの子ども一人一人の発達段階や特性を見極め、それぞれの発言が理解できるように代弁し、子ども同士の対話を支えていく。	子ども同士の対話を見守りながら、必要な場面では言葉を足したり説明したりして自分の思いに折り合いをつけられるよう援助する。	様々な環境(=異なる園)から集まった集団でも、それぞれの園での育ちや学びを生かしながら、子どもたち一人ひとりが安心して発言したり傾聴したりできる環境づくりを行う。	自分の思いや考え(喜怒哀楽)を塞ぎ込まずに友だちや先生に伝えられる環境づくりを行う。	集団の中でも自分の意見や問い、疑問を投げかけながら、それぞれの納得解に向かえるようにする。
	言葉かけ key words						

